太平記を読む会第１９回例会
２０２０年8月１７日

コロナと高温の二重苦に、お盆明け直後という日程上のハンディも加わって、出席者は６名と、少しさびしい例会になりました。輪読箇所は、金ケ崎城の落城で意気消沈した越前の南朝軍が盛り返す一方、鎌倉を落して美濃に達した北畠顕家が急に軍を伊勢方面に転じて動乱の行方が混沌としてきた場面。戦闘のなかでの民衆の苦悩、中国故事への武士階級の理解などをめぐる疑問も出て、ひととき、意見が交わされました。

◇この日読んだ個所は次の通りです。

（三）義貞越前府城を攻め落とさるる事

越前新田軍の再起（ｐ３０６～３０８）

金ケ崎城の落城以前に瓜生氏の居城、杣山に移っていた新田義貞、脇屋義助の兄弟は、再起を目指して軍勢の動員を開始。越前国内ばかりか隣国加賀の兵も呼応の動きを見せた。鯖江東方の要害、三峯に集結した軍勢は、義助の指揮下、足利方の斯波高経が籠る越前国府の攻略をめざす。

鯖江合戦（ｐ３０８～３１２）

新田軍集結の報に斯波高経は国府周辺の各所に陣を築き、兵を配して戦闘態勢を整える。対抗陣地設定のため少数で鯖江方面の探索に出た義助は、運悪く斯波勢に見つかってしまう。からくも攻撃をかわした義助一行は、付近の民家に放火して急を告げた。この結果、両軍本隊が日野川を挟んで対陣し、決戦となった。

新善光寺城落城（ｐ３１２～３１５）

雪解けで増水した日野川の渡河に成功した新田軍の勢いが勝り、国府の新善光寺城に撤退する斯波軍を追撃、敵の本城、国府の新善光寺城を占拠した。高経は越前北部の足羽城に逃げ、新田軍の圧勝に終わる。

（四）金崎の東宮ならびに将軍宮御隠れの事

二皇子を毒殺（Ｐ３１５～３１８）

新田義貞に奉じられて越前に下った後醍醐皇子恒良親王は、金ヶ崎落城の時、城外で逮捕され京都に連行された。親王は落城時、義貞以下が自害したと虚偽を述べ現地指揮官を誤らせたと、足利尊氏の怒りを買い、毒殺された。太平記は、同じ場所に拘禁されていた弟の成良親王も毒殺の対象としているが、数年後まで在世していた史料上の証拠があるので、太平記の記述は間違いであることが明らかだ。

（七）奥州国司顕家卿上洛の事

利根川合戦（ｐ３２２～３２６）

奥州軍を率いる北畠顕家は再度の上洛を目指して霊山を出陣、利根川の渡河に成功して鎌倉に迫った。

厭戦気分の鎌倉勢（ｐ３２６～３３０）

武蔵国府で戦列を整えた顕家軍には、北条高時の遺児、時行の伊豆勢、新田義貞次男、義興の上野勢も加わって大軍となった。足利勢には抗戦を不利と見て鎌倉放棄の意見が大勢。これを僅か十一歳の東国管領、足利義詮にたしなめられ、ともかく応戦することに。

（八）桃井坂東勢奥州勢を追跡

奥州勢、東海道を驀進（ｐ３３０～３３３）

奥州勢は戦意なき鎌倉を落すと、直ちに西進、街道の農家を略奪しながら美濃に入る。鎌倉で敗れた足利勢が立ち直って、この奥州勢を追撃した。

（九）青野原軍の事　（一〇）嚢砂背水の陣の事

不可思議な顕家の転進（Ｐ３３３～３４３）

美濃に入った顕家の奥州軍を、追跡してきた関東勢と地元美濃の土岐勢が、後の関ヶ原に当たる青野ヶ原で迎え撃った。顕家の勝利を知った幕府は、美濃と近江の境に援軍を出すが、顕家はこれと戦わず、伊勢路に向かった。古来、越前で優勢な新田義貞軍と合流して京都を攻めなかったことへの戦略批判がある。

第２１巻輪読予定ページ（１０月１９日）

１）４０９この比～４１２なかりけれ
２）４１２山門の～４１５なかりけり
３）４１８康永三年～４２２給ひける
４）４２７この両三年～４３１洗がれける
５）４３８武蔵守～４４１言の葉もなし
６）４４２侍従帰りて～４４６失せにけり
７）４４６師直は～４５０追つ懸けたり
８）４５０塩冶が若党～４５４なかりけり
９）４５４山陽道を～４５９追うて行く
１０）　４５９この間に～４６３人もなし

この巻のハイライトは、3）です。後醍醐天皇の崩御を扱っています。